

短報

タグラグビーとは Review of Tag Rugby

溝畑 潤¹⁾ 藤林 園子²⁾ 溝畑 寛治³⁾
Jun Mizohata¹⁾ Sonoko Fujibayashi²⁾ Kanji Mizohata³⁾

Abstract

Tag rugby is a non-contact and safe game which replaces full contact rugby. It is suitable for children, and for both boys and girls to play together. All players wear two tags on either side of their waist on a belt. If a player's tag is detached by an opposing player, the tagged player must then stop running with the ball, namely, tag rugby which replaces tackle with the removal of a tag attached by the player. It allows participants to focus on the basic core skills for handling and running. Therefore, it is widely used in primary schools and by Under-10 year old grade at rugby clubs as the introduction to full rugby in England, Wales, Australia and South Africa.

The ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in Japan revised government guidelines for teaching at elementary school. Tag rugby is introduced into physical education of elementary school, which expects students make progress in their motor ability when they play tag rugby.

However, a few problems need to be considered when teaching tag rugby at elementary school. Firstly, many teachers have not yet been familiar to tag rugby. Secondly, it is very difficult to teach that the rugby ball must always be passed behind or laterally to another player. Lastly, refereeing is very difficult due to complicated rules.

キーワード タグラグビー, 歴史, 試合
Tag rugby, history, game

1. はじめに

近年、子どもの体力低下や肥満傾向、学校現場において転倒に伴う骨折などの怪我の割合の増加が報告されており、身体のバランスを上手に調整できない子どもが増加している(中村, 2004)。神経系の発達はきわめて早い時期にみられるため、幼少期に様々な運動動作を行うこ

とは健全な成長を促進するために必要不可欠である(宮下, 2009)にも拘わらず、我が国の学校教育現場では学力低下に伴う主力教科の授業時間の増加は取り組まれたものの、体育の授業時間を増加する試みはなされなかった。しかしながら、文部科学省は2008年3月に小・中学校の学習指導要領および幼稚園教育要領を改訂

1) 関西学院大学

Kwansei Gakuin University

1-155 Uegahara Ichiban-cho, Nishinomiya 662-8501, Japan

2) 大阪医専

Osaka College of Medical

3) 関西大学

Kansai University

し、主力教科の授業時間の増加だけでなく、体育の授業においても同様に授業時間数を10%程度増加、週当たりのコマ数を低学年で週2コマ、中・高学年で週1コマ増加することとなった。

今回改訂された小学校学習指導要領の体育（運動領域）では、中学年および高学年にタグラグビーが教材として導入されることとなった。このタグラグビーは、従来行われているラグビーフットボール（以下ラグビー）とは異なり、コンタクトプレーを伴わない安全性に優れたラグビーである。タグが奪われるとタックルが成立したことになり、ボールを持っている選手は味方選手にパスをしなければならない。タグを取るタイミングやパスをするタイミングが重要であり、状況判断能力や運動神経促進の向上に大変効果的なスポーツである。今回の小学校学習指導要領改訂によるタグラグビー導入には以下の二つのメリットが考えられる。先ず一つは発育発達期の初期にある小学生の運動指導において神経系を促進する運動動作は重要であり、タグラグビーが実施されることは、子どもの運動能力や体力向上に大変効果的である。そしてもう一つは、ラグビーというスポーツの認知度を高められるとともに、ラグビー人口の増加、2019年に日本で開催されるラグビーワールドカップに向けた選手育成とタレント発掘に大きな影響を与えると考えられる。海外のラグビー強豪国では、すでにラグビー選手育成の為の一貫指導として、10歳以下のラグビーとしてタグラグビーが導入されている（Liddiard,2006）。一方、我が国ではタグラグビーは数年前から紹介されてきたものの、ラグビースクールでは人数とコートは異なるが、大人と同様のコンタクトを伴うラグビーを実施している。タグラグビーが広く普及することにより、我が国においても安全性および将来性を配慮したラグビーの一貫指導が確立することが期待される。しかしながらその一方で、タグラグビーをラグビー未経験者が指導またはレフェリーしなければならない問題もあり、広く普及発展させる上で解決しなければならない問題もある。そこで本研究は、より良いタグラグビーの普及活動に繋がるよう

にタグラグビーの歴史、研究および指導書、指導上の問題点などを明らかにすることを目的とした。

2. タグラグビーの歴史

タグラグビーは、1990年代のはじめにイギリスのデボン州で考案された（高山，2004）と言われている。また、オーストラリアにおいても13人制のリーグラグビーのトレーニングとして1992年から1993年にかけて夏のオフシーズントレーニングとして考案されたとも言われている。日本では、1996年にイングランドに留学していた仙台大学の勝田隆が、用具やガイドブックを日本に持ち帰り、タグラグビーを紹介したと言われている。また、元日本代表、神戸製鋼ラグビー部の大八木淳史が、チームメイトだったウェールズ人のマイク・イーガンからタグラグビーを紹介され、現役引退後、全国各地でタグラグビー講習会を実施した。その後、日本ラグビー協会がタグラグビーの普及に全面的に取り組み、故石塚武生らが中心となり全国的にタグラグビーの普及活動が行われた。2005年には、サントリーカップ第1回全国小学生タグラグビー選手権大会が開催された。この全国大会の前には各地域ブロックでの予選大会が実施され、そこで優勝したチームが本大会に出場することができるというシステムになっている。今年で8回目を迎えるこの大会は、参加チーム数が増加傾向にあり、各都道府県での予選大会から熱戦が繰り広げられている。

3. タグラグビーの研究および著書

日本において、最初に出版されたタグラグビーの教本は、高山由一が2004年に「心と体をはぐくむタグラグビー」を発行している。この教本では、タグラグビーを学校体育教材として活かせるように工夫がされている。具体的には低学年、中学年および高学年のそれぞれのレベルに応じた指導ができるように、学年ごとに練習方法や指導計画書、学習カード、スコアカードおよび授業の振り返りのための感想ノートなどが掲載されている。

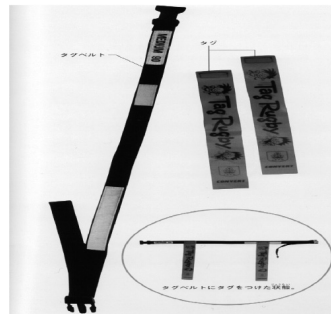
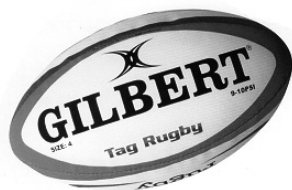
佐藤善人および鈴木秀人（2008）は、タグラグビーに関する研究論文および著書を数多く発行している。その中の一つにラグビー独特のルールである「スローフォワード」に焦点を当てた研究がある。スローフォワードとは、その言葉通り、「ボールを前方に投げること」でありラグビーでは反則となる。タグラグビーのルールにもスローフォワードは採用されている。スローフォワードが、実際にプレーする児童にとって難しいものであるのか検討した結果、学習を重ねるごとにスローフォワードを「やさしい」と意識するようになることが判明した。そして、実際のゲームにおけるスローフォワード出現率も、学習を重ねるごとに顕著に低下し、ほとんど見られなくなったと報告している。

鈴木秀人（2009）が出版した「だれでもできるタグラグビー」は、小学校学習指導要領改訂によるタグラグビーの導入が確定したことによ

り、より具体的な指導方法が掲載され、小学校教員に向けたタグラグビーの教科書となっている。

4. タグラグビーの試合方法およびルールについて

タグラグビーで使用する道具は、ラグビーボール、タグベルトおよびタグである。ボールの大きさは低学年および中学年が3号球（縦の周囲66～68cm、横の周囲48.5～50.5cm）、高学年は4号球（縦の周囲68.5～70.5cm、横の周囲51～53cm）を使用する。選手はタグベルトを腰に巻き、マジックテープになっている部分にタグを付ける。タグベルトを装着する際、シャツはズボンの中に入れてタグベルトを取り付けることが望ましい。タグは、両横に1本ずつ付ける（写真1）。写真2はタグベルトを装着した女子選手である。



Picture1. Official tag rugby ball (Left) and tags and tag belt (Right)
 (こどもくらぶ編「タグラグビー」(岩崎書店)、p. 6およびp. 7から引用)



Picture2. Player wearing tags and tag belt

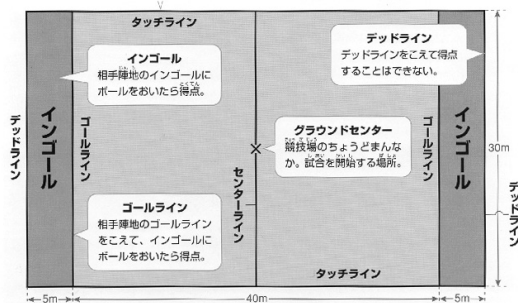


Figure1. Tag rugby pitch dimensions

(写真2 および図1 はこどもくらぶ編「タグラグビー」(岩崎書店)、p. 6およびp. 9から引用)

図1は、コート大きさを表したものである。縦が50m以内（インゴールを含む）、横が30m以内と規定されている。タグラグビーではゴールポストは使用しない。従って、平地でさえあればどのような場所でもタグラグビーを行うことが可能である。プレーヤーの人数は5人对5人を原則とするものの、チームの人数が5人よりも多い場合、途中で選手交代してもよい。試合時間は、前後半各7分、ハーフタイムは1分で行われる。

試合は、グラウンドセンターから攻撃側のパス（フリーパス）によって開始される。守備側が攻撃側のタグを4回奪ったら攻守交代となる。従って攻撃側は、4回以内でトライをしなければならない。守備側は、タグを取ることで前進を止めることができる。タグを取られた攻撃側は、すぐに止まり3歩以内で味方選手にパスをしなければならない（写真3）。ボールを持っている選手が、タッチラインを踏んだり超えたりした場合は、ラインを超えた地点から相手チームのフリーパスで開始する。トライをした後の再開方法は、グラウンドセンターから得点されたチームのフリーパスで再開される。



Picture3. The tagger is removing tag

（写真3はこどもくらぶ編「タグラグビー」（岩崎書店）、p. 4から引用）

前述した通り、タグラグビーにおいてもスローフォワードは採用されている。また、ラグビ

ーにはオフサイドルールがあり、タグを取った守備側の選手は、全員ボールよりも後方に戻らなければならない。さらにタグラグビー独自のルールとしては、相手選手に故意にぶつかってはならないこと、ダイビングトライをしてはいけない等がある。

5. タグラグビーの今後の課題

タグラグビーの「Tag」は、英語で「鬼ごっこ」であり、鬼ごっこは日本でも大変馴染み深い子どもの遊びである。鬼ごっこにボール遊びが加わったタグラグビーは、相手の動きに対応したり、相手を抜くためにステップを踏んだり、味方に良いタイミングでパスしたり、運動能力を高める為の要素が多く含まれている。また、試合中の攻守の切り替えが多くみられることで、体力向上にも大変効果的であると考えられる。しかしながら、その一方で腰につけたタグを取ることは、意外に難しくタグをうまく奪えない子どももいる。従って、タグラグビーの普及のためには、ベルトの位置やタグの形状等について検討する必要があると考えられる。また、指導上の留意点として、ボールを持った選手がパスをしないで突進するケースがある。タグを取られる前にパスをすれば、ボールを動かし続けることができ、タグラグビーの本来の面白さを引き出せる。著者が2ヶ年間、ウェルズ大学に留学した際、地域のラグビークラブでタグラグビーの指導を行なった経験がある。その時もパスで相手を抜き、ボールを繋ぐことが指導上の大きな課題となった。Button (2011) は、ミニサッカーのゲームにおけるスウォーミング（集団行動）について研究し、子どもがサッカーボールに群がらず、パスやドリブルを多用できるようにするために、ピッチの大きさや試合時間および参加人数について検討している。タグラグビーにおいてもグラウンドの大きさ、参加人数、試合時間およびルールについて今後検討する必要があると考えられる。

文献

Button,C. (2011) Exploring the swarming

effect in children's football, 7th World Congress on Science & Football, Vol. 8, Suppl. 1, p.59.

こどもくらぶ (2009) あたらしいボールゲーム
④タグラグビー, 岩崎書

Liddiard, J. (2006) tag rugby, A & C Black Publishers Ltd

宮下充正 (2009) 子どもに「体力」をとりもどそう, 杏林書院, pp.38-41

中村和彦 (2004) 子どものからだは危ない!, 日本標準

佐藤善人 (2011) タグラグビーの実践を始める前に知っておきたいルールのあれこれ, 体育科教育, 大修館書店, pp. 19-22

佐藤善人, 鈴木秀人 (2008) 小学校の体育授業におけるタグ・ラグビーに関する研—スローフォワードルールに焦点をあてて—, スポーツ教育学研究, Vol.28, No.1, pp.1-11

鈴木秀人 (2011) タグラグビーとフライングフットボールの特性を考える, 体育科教育, 大修館書店, pp. 10-14

鈴木秀人 (2009) だれでもできるタグラグビー, 小学館

高山由一 (2004) 心と体をはぐくむタグラグビー, 東洋館出版社